

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ヨーロッパのメイ・デイのダンス   |
| Sub Title        | Dances on May day in Europe   |
| Author           | 本間, 周子(Honma, Shuko)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学体育研究所   |
| Publication year | 1978  |
| Jtitle           | 体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.19, No.1 (1979. 12) ,p.1- 10  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00190001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00190001-0001</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ヨーロッパのメイ・デイのダンス

本 間 周 子\*

1. は じ め
2. メイ・デイについて
3. メイ・デイのダンスについて
4. メイ・デイのダンスの歴史的考察
5. む す び

## 1. は じ め

メイ・デイ (May Day) の祭りの行事は、古代ゲルマン民族の原始的祭儀の名残りであり、冬の終りと春の到来とを同時に祝うものでもある。そこには人びとの率直な生への歓喜が歌や踊りなどに表現されている。

本稿では、ヨーロッパにおける太古以来行なわれていたメイ・デイと、この祭りに欠くことの出来ないメイポール・ダンスが、いかなる意義をもち、どのように行なわれたかを中心として考察し、それらの歴史的背景と展開について述べるものである。



Maypole Dancing at Kingkerswell  
in Devon. C. 1900.

## 2. メイ・デイについて

メイ・デイ (May Day) は字義どおり五月祭であり、また労働祭でもある。後者の意味をもつようになったのは近代になってからのことであり、したがって本稿においては五月祭としてのメイ・デイについて述べる。

May (ラテン名 Maium) の語源については明らかではないが、一般的には (Mercury の母)

---

\* 慶應義塾大学体育研究所助教授

から出たものといわれる。またある説ではラテン語の Mag, サンスクリット語の Mah から出て 'Grow' の意と変化したものであり、したがって May は万物生成の 'The growing month' の意味ともいわれる。

(1)

5月1日に行なわれる May Day festival の起源については、古代ゲルマンのゴート族 (Goths) の遺風とも、またギリシャ男性の象徴を崇拜する風習 (Phallic rite) と結びつける説もあるが、一般的にはローマの花祭り (Floralia), すなわち花の神 (Flora) の祭日の遺風といわれている。これは本来自然物崇拜の信仰に基づくものであり、5月1日を季節の分れめとしてきわめて重要な日とみなしたことに発していると推定される。

#### メイ・デイの風習

イングランドにおいては、南部地方でも五月祭の終り頃にかけてかなり厳しい霜をみることが多い。

“Ne'er cast a clout till May is out” という諺が残されている。イングランドの田舎に住む人びとのあいだでしばしば子供たちに語り伝えてきた諺である。厳しい寒さのため、少なくとも五月の終り頃までセーターやフランネルの下着、厚いズボンやこれに似たような防寒着を着つけていたのである。いんうつな冬がすぎ、ようやく五月ともなると鳥のさえずりは野原に満ち、ブルーベル (Blue bell) の花やさくら草が咲き乱れ森を一面に埋めつくす。一度に片足で9つのひな菊の花をふめればもう春だ……と人びとは永かった冬の終りと訪れくる春を心はずませて待ちうけていたのである。

やがて訪れる春、それは豊饒を期待する季節でもあり、人びともこの自然の営みに参加する風習を古い時代から持ち伝えてきたのである。旧メイ・デイ (Old May-Day) は5月13日であるが、少なくともそのころまでには戸外で夜をすごすことができるくらい暖かくなっており、若い男女は森に出かけ生命の更新儀式に参加するのであった。そして次の朝、新芽をふかんとしている緑の小枝を持ち帰り、自然復活の行事に自分たちも従った旨の証しとしたのである。

(2)

たとえばシェイクスピアの喜劇『真夏の夜の夢』 (A Midsummer Night's Dream) は、さんざしの花咲くメイ・デイの前夜にかけて起こった事件を取扱ったものであるといわれる。また聖ヨハネ祭の前夜に青年男女が森に行き樹木の枝や草を求める風習がある。このような民間信仰は

(3)

キリスト教よりも古い原始的祭儀に属するものである。人びとは祝い火をたき、酒を飲み余興を催し、底抜け騒ぎをし、やがてくる春の訪れとともに豊饒を祈り、青春の解放感をうたいあげ乱舞したものであろう。

#### メイ・デイのダンスと樹木崇拜

ドイツの農村では、農民たちが5月1日に「五月の樹」とか「五月の灌木」と呼ぶ樹木を家畜のために立てる風習がある。このような祭りをすることによって家畜は乳を多く出すように

なると信じられていたからである。  
(4)

スウェーデンの農村ではメイ・デイの宵「五月の樹」を若者たちがかつぎ、村のバイオリン弾きを先頭にして五月の歌をうたい踊りながら家々をまわる風習がある。その時歌われる歌は、よい天気、豊かなみのり、この世の祝福を願い求める祈りの歌である。  
(5)

イングランドのコーンウォール地方に今なお残っている古代からの風習の中に、5月1日に家を緑の小枝で飾り、家の前に樹をたてる行事が残されている。それは5月1日の朝、真夜中を過ぎたころ若者たちが起き出し、音楽を奏で、角笛を吹きながら森に行き樹を伐る。その樹を村人たちが歓声をあげて見守るなかで広場にうちたてる。そして顔を黒くぬったモリス・メ  
(6)

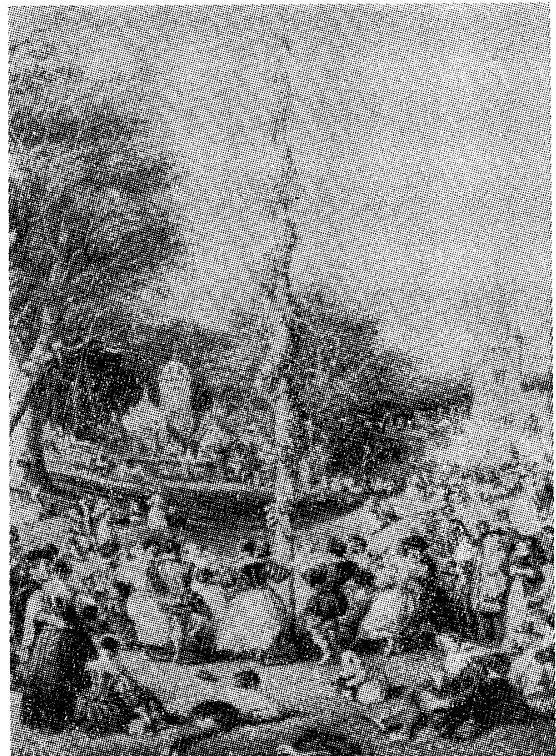
メイ・デイに「五月の樹」を広場に立てる風習は、前述のように樹木の精霊による豊饒多産の信仰に求められ、ヨーロッパ農民の通俗的な祭りとして広くゆきわたっている。

メイ・ポール（五月の樹）やクリスマス・ツリーの起源として北歐神話にある「宇宙樹」が関連しているという説がある。宇宙樹は、宇宙を支えるという「おおとねりこ」の木であり、その根は天国と地獄を連結し、その枝は広く張って全世界をおおうといわれている。そしてその頂にはワシ、その根にはヘビが宿り、両者の間をリスが走り回って争いを起こさせたとされている。これは古代人が大自然の象徴としての樹木の精にうたれ、樹木崇拜の思想をいだいたものと思われる。その意味においてメイ・ポー  
(7)

ルやクリスマス・ツリーの樹木崇拜思想と通ずるものがあり、メイ・ポール、クリスマス・ツリーの原型として宇宙樹があるのではないかとの説にも肯定できるものがある。

J.G. Frazer は「五月の樹」についてその著書『金枝篇』の中で多数の例を挙げて説明している。例えばロシアの村人たちは聖霊降臨祭の前の木曜日に森に入って歌をうたい、花輪をつくり、樺の若木を伐ってそれを色とりどりの細い布きれやリボンで飾る。そして祝宴の後、飾りたてた樺の木をとり上げて歌い踊り、村へ持ちかえり、聖霊降臨祭の当日まで大切に広場に立てたのである。  
(8)

ストックホルムでは、木の葉の市がたち、木の葉や花や色紙などで飾った何千本という「五

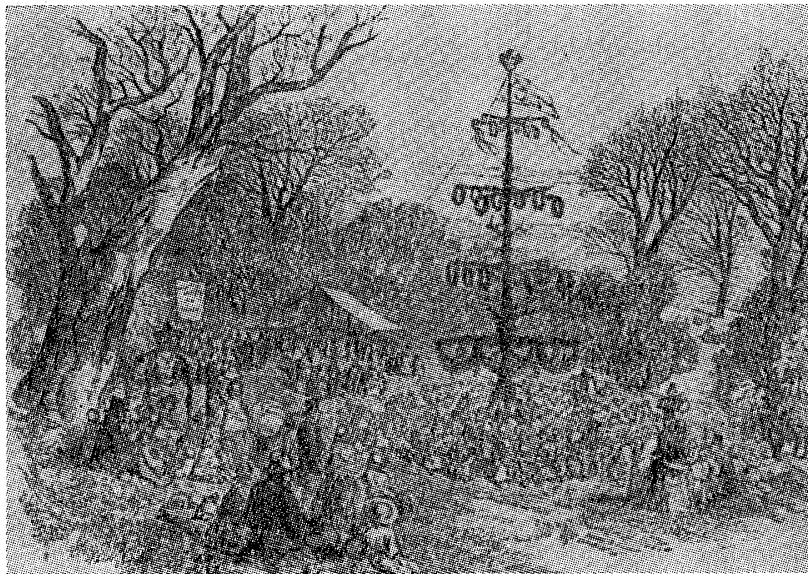


A Maypole Dance in the Sixteenth Century

月の棒」が売り出される。そしてその日の呼びものは「五月の棒」をたてる行事であった。これはまっすぐな高い松の木のおろしたものであり、それは乙女たちによって飾られるのであるが、厳粛な行事の一つとなっている。村人たちは四方から集り、その周囲に大きな輪を作り踊ったのである。<sup>(9)</sup>

ドイツのハルツ山地の町々では、高いモミの樹を広場にたて、花や卵でそれを飾る。そしてこれを取り巻き昼は若者たちが踊り、夜は老人たちが踊るのである。ボヘミアでも聖ヨハネの<sup>(10)</sup>祭日の前夜、若者たちが森から大きな松やモミを伐り高い所に打ち立てる。乙女たちは花束、花輪、赤いリボンなどで飾りつけ、村人たちは音楽に合わせてそのまわりを楽しく踊り廻るのである。<sup>(11)</sup>

以上の数例からもわかるように共通の風習となっているのは毎年新しい「五月の樹」を迎え、飾り、踊るということである。しかしイングランドでは次第に恒常的なものとなり、毎年とりかえられることはなかったようである。もともこの風習の根源は、前述のように春になって生命をよみがえらせる樹木の精霊を迎えることにあったのが歴史の経過とともにその意義は忘れ去られ、メイ・デイのシンボルとしてのみ存在し、人びとの踊りの中にその痕跡を残しながら祭礼の集まりの中心となってきたものであり、後には娯楽的要素が多くなったものと考えられる。



May-Day 1852, and Maypole in th village.

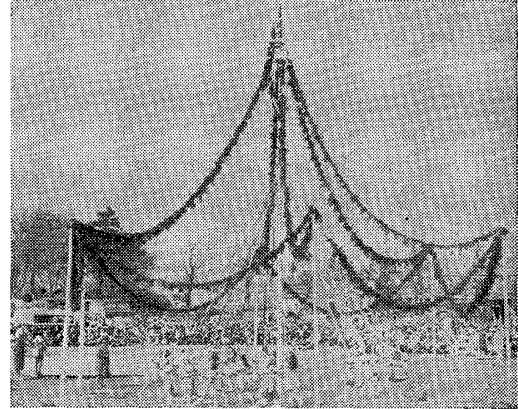
### 3. メイ・デイのダンスについて

各学校の運動会や、メイ・デイの祭礼の折りに踊られるメイポール・ダンスは、その素朴な

ヨーロッパのメイ・デイのダンス

ステップと、リボンによって美しく飾りたてたメイポールとが調和し、さらに人びとの躍動するリズムがその頂上から下げられたリボンを通して華やかに織りなされてゆくダンスである。メイポール・ダンスはそれぞれの地方によって踊り方に多少の違いはあるが、最も一般的なメイポール・ダンスについて述べる。

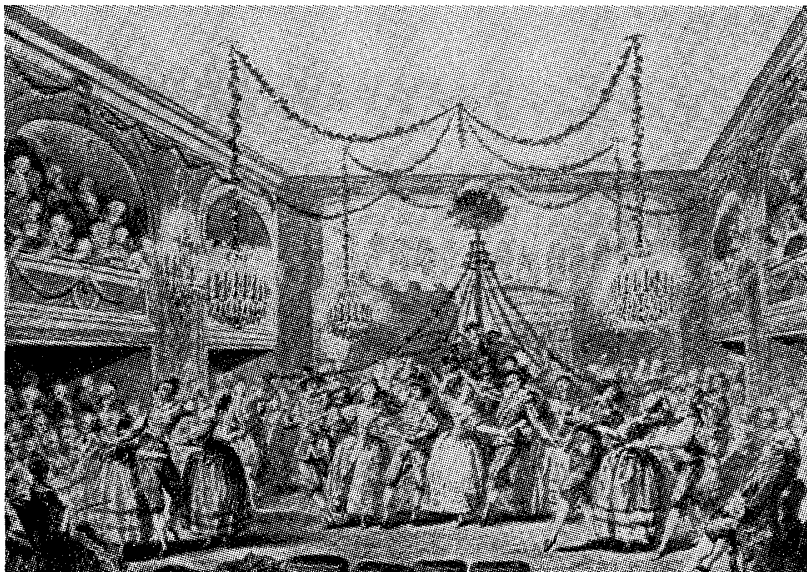
まず、踊り手はメイポールのまわりを輪になってとりまき、各自ポールの頂上からたれ下るリボンを持って踊るのである。踊り手の持ったこれらのリボンはポールを中心にして傘のように広がり、踊り手がポールのまわりをステップやホップや、ターンをくり返しながらか進行すると、美しくゆらぎながら円錐形を作り上げる。また、円周上に並んだ踊り手が二人一組となって互いに向き合い、各々の進行方向にジグザグにホップやスキップを交えながらか進行すると、色違いのリボンもまた



Maypole plaiting at Knutsford, Cheshire.

た踊り手の動きにつれて美しい編み目を織り上げたり、ときほぐしたり、見る者の目を楽しませてくれる。これが一般的なメイポール・ダンスである。

英国においてはこのようなリボンを持って踊るメイ・デイの風習は、いつ頃か行なわれたのかは明らかではないが、1900年頃、ベッドフォード州、シール村で始まったものと伝えられている。



“LE BAL DU MAI”  
Danced at Versailles at the Carnival of 1763.

Cecil J. Sharp and A. P. Oppé の「*The Dance*」という著書の中に、1763年、フランスのベルサイユ宮殿のカーニバルの一場面、「五月の舞踏会」という絵が収録されている。そこには着飾った紳士、淑女たちが、明らかにメイポールと思われるさんざしの木を頂いたポールのまわりを、リボンの前身と思われる寄生木の緑のつる草をにぎり、楽しげにダンスをしている様子が描かれている。これは18世紀の中ごろにはすでにメイ・デイのダンスとして庶民たちの間で踊られていたメイポール・ダンスが、貴族たちの催す舞踏会の中にもとり入れられ、宮廷風に洗練され、アレンジされたメイポール・ダンスとして登場していたことを物語るものと推定される。

メイ・デイの祭りで重要なものはメイポールであり、そのまわりで踊られるのがモリス・ダンス (Morris Dance) と呼ばれる踊りであった。モリス・ダンスは春の祭礼儀式に関係をもつ男子の踊りのことである。

伝統的にはモリス・メンたちが一年の最初に現れるのは5月1日であった。つまり、この意味はメイ・デイに本来踊られたダンスはモリス・ダンスであったということである。

この踊り自体は15世紀から殆んど変化なく続けられてきたようであるが、しかし実際にはそれ以前から英国の各地で演じられていたものようである。ただメイ・デイに演じられる主たる踊りが、モリス・ダンスから現在一般的に踊られているリボンを持つメイポール・ダンスに移り変ってきた経過は必ずしも明らかではなく、今後の調査研究をまたなければならない。しかし人びとが、メイポールから垂れ下ったつる草やリボンを手にしてポールのまわりでモリス・ダンスを演じたことが伝えられているので、あるいはモリス・ダンスが伝承の過程において分化して、そのステップも単純化され、現在演じられているような独立したメイポール・ダンスとなったものと推察することができる。

次に、さきに慶應義塾大学、体育研究所紀要、第14巻に<sup>(12)</sup> おいて紹介したモリス・ダンスの実際について補足してみたい。

代表的なモリス・ダンスの服装は、白いシャツに白いズボンをつけ、幅の広いリボンを襷がけにつけ、リボンの中央に彼らの所属するフォーク・ダンスクラブのバッジを飾ったりしている。両足のひざから足首にかけては多数の鈴がつけられて、モリス・メンが力強くジャンプをするたびにその鈴の音は高らかに鳴りわたる。踊る時にふつうハン



Morris stick dance

ケチや短い棒を用いたりする。棒を用いて踊るモリス・ダンスの場合は、グループの中できめられたパートナーとうまく呼吸を合わせると調子よくお互いの棒を打ち合わせることができ

る。棒は片手に持ったり、打ち合わせる時には両手で頭上に棒を保持したりする。

このような棒によって打合うダンスの型は古くから英国をはじめ、ヨーロッパ各地で伝統的に演じられているソード・ダンス (Sword Dance) の剣がハンケチや、棒に変化したものと推測される。またモリス・ダンサーたちが多く着る色とりどりの布切れを縫いつけた上衣は、メイ・デイの祭りに欠かすことの出来ないジャック・イン・ザ・グリーン (Jack in the green) と呼ばれる青葉男の木の葉の衣を連想させる。

このグリーンの飾りつけは樹木そのものの模倣であると同時に、生命の再生を意味している。すなわち万物の成育・成長・新しい活力への期待と憧憬を表現しているものと考えられる。

モリス・ダンサーは英国全村の緑のシンボルとも云うべきメイポールのまわりや、あるいは町や村の通り、教会の広場を踊りねり歩いたのである。彼らの演ずるモリス・ダンスは、暖かなよい季節を迎えるよろこびを人びとと共に祝い、生を謳歌したものであった。



The 'Beaux of London City'  
Morris Men.

このようなモリス・ダンスがほそぼそと英国の片田舎に伝承されていたのである。それが19世紀末、セシル・シャープの目にとまり、復活され今日一番よい季節に英国各地で見ることが(13)できる程度にひろまったものである。

#### 4. メイ・デイのダンスの歴史的考察

##### 清教主義とメイ・デイ

17世紀中葉、ヨーロッパ大陸におけるあらたな宗教改革の波は、英国における政治上・宗教上の新しい運動を活発にした。特にジョン・カルビン (John Calvin, 1509—1664) の神学を奉じた人びとの清教主義 (Puritanism) の影響が大きかったのである。それは聖書に基づいてその生活を律することを信条とした厳しいものであった。すなわち「祈りによって直接神と交わり、謹んで己れを省み、罪悪感が深く」と当時の宮廷人が華美かつ放蕩であったのとは全く相反した信仰であった。(14)

この厳格きわまりない信仰をもった清教徒たちは、古くからの祭儀を抑圧し、時には完全に禁止、破壊したのである。音楽や舞踊や芝居などの娯楽は最も世俗的な快楽として斥ける厳しい態度に終始したのである。



## ヨーロッパのメイ・デイのダンス

したがって清教徒革命の一時期にはこの種の娯楽はほとんど禁止されたため、あるものはしばらく中断を余儀なくされ、またあるものはこの期間中に消え去り再び世に出ることはなかったと思われる。

このような清教徒的な風潮のなかでメイ・デイや、それにかかわる庶民のダンスや生活行事はどのような変革を余儀なくされたかをたどることは決して無意味ではないと考えられる。

清教徒たちの娯楽に対する厳しい態度は次の一例によってもある程度理解される。

フレイザーの著者『金枝篇』によれば、清教徒的著述家であるフィリップス・スタップズは『悪習の解剖』の中でメイポールをたてたてまつを激しい嫌悪感をもって叙述しているのがある。反面、彼の記述はかえってその昔のメリー・イングランドの光景を浮ぼりにして見せてくれるものでもある。

「五月、聖霊降臨祭その他の時期に、若者、乙女、老人、人妻などすべての人たちが一晩中、森や林や山を遊び歩き、そこで楽しく打ちそろって夜を明かす。そして彼等の宝、メイポールは非常な崇拜の心をもって運ばれるのである。このメイポール（むしろ鼻もちならぬ偶像）は花と葉で覆いつくされ、てっぺんから根本まで紐でぐるぐる巻かれ、ときとしては色とりどりに塗り、二、三百人の老若男女が敬けんそうにつき従う。そしてこの棒を地面に立てて、一同がそれを取り巻いて騒々しく歌い踊るのであるが、このさまは偶像奉納の際の異教徒たちに似ており、全く様式どおり、むしろそのままである。極めて信用できる人の確かな報告によれば、森林で夜明しをする百人にもものぼる乙女たちのうちで、元のままの清い身体で戻ってくるのはせいぜい三分の一くらいなものだった。」と述べている。著者の清教徒的なストイックな論調の強さに当時の思想の一端が垣間見られると同時に、宗教改革が行なわれた当時の享楽主義的な人びとの生への賛歌もまたにじみ出ている。

モリス・ダンスにつきもののメイポールは、清教徒たちから見ると嫌悪すべき対象であったが、1500年代の始めごろまでは、未だ庶民もこの厳格な革新主義者たちをピューリタン（Puritan）と蔑称し、伝統のメイ・デイの風習も、メイポールのまわりでのモリス・ダンスもともに賑やかに楽しんでいたのである。特にイングランド、スコットランドにおいては全域にわたって盛んに行なわれており、16世紀前半のヘンリー8世時代はその最盛期であった。

しかし次第に清教主義があらゆる階層に浸透してくるとともに、この陽気なメイ・デイの風習や祭りは衰微の止むなきに至り、行事暦から消え去りみられなくなるのである。

このような清教徒たちの厳格な禁欲的態度は庶民たちの楽しみであったモリス・ダンスを国法によって厳禁し、土着の踊りなどと共にわれわれの目にふれなくしてしまったのである。

しかし人間の生命への躍動は一片の禁止令や、権力、宗教によって絶滅できるものではないことは歴史の証明するところである。

## 祭りの復活

宗教的支配が強かった清教時代はやがて崩壊し、王政復古の世になると共に、庶民の清教主義に対する反動は急激に高まり、自然、現世肯定の快樂追求的な方向へと向うことになる。

国王チャールズ二世は1660年5月29日（Oak Apple Day）王政復古のためにロンドンに入京したのである。この日は王が Worcester の戦いに敗れた時、かしの木に隠れて難をのがれた事を記念した祭日である。

この事によって衰微の一途をたどりながらも庶民の中に細々と受継がれていたメイ・デイの習俗は Oak Apple Day に切りかえられ、祭りの伝統的行事はこれに包含されてしまったのである。しかしところによっては聖霊降臨節の祭りに、このメイ・デイの伝統的行事がうけつがれているところも散見される。

いずれにしても清教徒たちによって抑圧され、罪悪視されたメイ・デイの行事であるメイポール・ダンスは、王政復古という政治変革を契機として再び庶民の間によみがえったと云える。しかし、これはあくまで契機であって、本質的には庶民の生への肯定のエネルギーがよみがえり、生命を謳歌し生活を楽しもうとする人間復活としてのメイポール・ダンスの再生と考えられる。

## 5. む す び

ヨーロッパ各地で行なわれているメイポール・ダンスは、本来メイ・デイ（五月祭）のダンスとして庶民の生への賛歌であり、現実肯定的な思想の所産であったと考えられる。

この庶民の生活に密着したメイ・デイのダンスは、その歴史的過程において、ある時は清教徒的な思想によって排斥されながらも1660年王政復古を契機として再びよみがえり、不滅の生命力をもって庶民の生活と共に歩んできたと云える。

このメイ・デイのダンス本来の起源は、メイポールを中心として踊る形態からみて、原始、古代の人たちの自然物崇拜思想、樹木崇拜思想にあると思われる。

このようにメイポール・ダンスは原始的な民間信仰に根源をもちながら、豊饒多産を願う庶民の心が象徴されているものと考えられる。したがって現在のメイポール・ダンスは、原始的な宗教的背景をもちながら、その本来の意味は歴史の経過とともに忘れ去られて、メイ・デイをことほぐ祭りの行事として、あるいは運動会用としてなおも人びとの間に根強く生きつづけているのである。

メイポール・ダンスの生命は、つねに庶民と共にあるが故に不滅であり、歴史的な有為転変をこえて今後共に生きつづけて行くものと思われる。

- 注 (1) 井上義昌編『英米故事伝説辞典』富山房 昭和47年 422～423頁。
- 注 (2) Ralph Whitlock, *A Calendar of Country Customs*, B. T. Batsford Ltd. London. 1978. 57頁。
- 注 (3) フレイザー著 (永橋卓介訳) 『金枝篇』一卷 岩波書店 昭和50年 262頁。
- 注 (4) 前掲 (3) 書 264頁。
- 注 (5) 前掲 (3) 書 261頁。
- 注 (6) 前掲 (3) 書 259頁。
- 注 (7) 前掲 (1) 書 703頁。
- 注 (8) 聖霊降臨祭 キリスト教会の祝日、復活祭から50日めにおこなわれる。古来この日の前夜を復活祭前夜に次ぐ洗礼の機会と考えこの日から一週間祝祭する慣例がある。
- 注 (9) 前掲 (3) 書 261頁。
- 注 (10) 聖ヨハネ 新約聖書の人物・聖人。
- 注 (11) 前掲 (3) 書 262頁。
- 注 (12) 41頁～49頁 71～72頁。
- 注 (13) Cecil Sharp (1859～1924) イングリッシュフォーク・ダンスの父 彼の功績を記念して Cecil Sharp House がロンドンに建てられフォークダンス アンド ソング ソサエティとして活動している。
- 注 (14) 斎藤勇著『英文学史概説』研究社 昭和38年 68頁。
- 注 (15) 前掲 (3) 書 263頁。

#### 参 考 文 献

- (1) Cecil J. Sharp and A. P. Oppé, *The Dance*, London, 1924; rpt. Yorkshire, 1972, plate 52.
- (2) Ralph Whitlock, *A Calendar of Country Customs*, London, 1978.
- (3) Roy Judge. *The Jack in the Green*, Cambridge, 1979.
- (4) Douglass Kennedy, *English Folk Dancing; Today and Yesterday*, London, 1964.
- (5) フレイザー著 (永橋卓介訳) 『金枝篇』岩波書店 昭和50年
- (6) 井上義昌編『英米故事伝説辞典』富山房 昭和51年
- (7) 斎藤勇著『イギリス文学史』研究社 昭和52年